

ショスタコーヴィチ:弦楽四重奏曲 第8番

第二次世界大戦の空爆による傷跡がまだ残るドレスデンを 1960 年に訪れた際、わずか 3 日間で書き上げられた作品。初演はベートーヴェン弦楽四重奏団により同年 10 月 2 日、レニングラードで行なわれた。「ファシズムと戦争犠牲者の思い出に」捧げられているが、ショスタコーヴィチの署名である「DSCH」の 4 音動機が用いられており、本作が自分自身に深く関連していることは明らか。自作からの引用も夥しく、交響曲第 1 番、第 5 番、第 10 番、チェロ協奏曲第 1 番、ピアノ三重奏曲第 2 番、歌劇《ムツェンスク郡のマクベス夫人》と枚挙に暇がない。自作以外にも、ディエス・イレ、ロシアの葬送古謡、ジークフリートの葬送行進曲、チャイコフスキー《悲愴》などからの引用が指摘されている。すべて短調からなる全 5 楽章は、中断なく演奏される。第 1、4、5 楽章がラルゴ、あいだに挟まれた第 2、3 楽章がアレグロ系という構成。死神の嘲笑的な踊り、突き刺すような苦痛、終わりのない嘆きの歌が、鋭く、そしてシニカルに描かれている。

シューベルト:弦楽四重奏曲 第14番《死と乙女》

1824 年に書かれた本作は、シューベルトのペシミスティックな情感が色濃く反映され、4 楽章全てが短調で書かれている。第 1 楽章の冒頭で奏される峻烈な主題が作品の性格を物語り、ロマン的な美しさを持つ第 2 主題もどこか不安な緊張感に満ちている。第 2 楽章には、シューベルトが 20 歳の頃に書いた歌曲《死と乙女》(死を恐怖する乙女と甘いささやきで彼女を誘う死神との対話からなる)が変奏の主題に用いられている。第 3 楽章は、激しい感情をほとばしらせるスケルツォだが、そのなかにもシューベルトらしい抒情が立ち現れる。第 4 楽章は、4 つの楽器のユニゾンで奏される冒頭主題と、流れるような旋律の第 2 主題とが絡み合いながら怒濤のコーダへと流れ込んでいく。